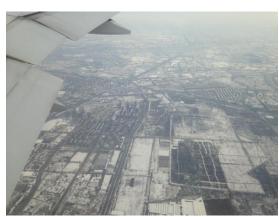
## 日中医学協会·成都出張

岡野 友宏(日中医学協会医療協力事業運営委員会・ADF 専務理事)

11月25日水曜日、成都には成田からの直行便があるが、成都到着が深夜で翌日の行動に支障が出る可能性があるということで、北京経由便となった。NH961羽田発、空いていて3席を独占できた。北京の気温は最高でも-5度とのこと、時期的にも異常な寒さだそうだ。入国手続きは20分待ちだが順調。国内線への乗り継ぎに移動、ここでの手荷物検査は非常に厳重であった。結局、成都行出発カウンターに着くまで、1時間を要した。搭乗は予定通り、しかしドアが閉まってから出発まで1時間待たされた。理由はわからない。成都の空港は町に近く30分程度でMinshan Hotel 岷山飯店に到着。昨年と同じホテルで、四川大学が徒歩圏内であるので便利。この日は近くの店で軽い夕食で終えた。ホテルのfree Wi-Fiはどこでも使えるが、やや反応が悪い。相変わらずgmail、Google検索はできない。このホテル周辺は道路も建物も整然とし、均衡も取れており、米国の都市にいるのかと勘違いするほどである。交通マナーは我々の標準からいうと誠によくない。右折は自由、バイクが歩道を走るなど。これは習慣がそうしているのであって決して悪意ではない。人々の服装もよく、態度にも余裕を感じられるようになってきているので、あとは交通規則を整備して指導すれば、我々は安心して道路を歩くことができるだろう。





北京上空

成都の空港





成都の市内

11月26日木曜日、8時、ホテルから華西口腔医院には徒歩10分。「診療技術研修・口腔実用技術」の最終日、8時半の開始、受講者は笹川生11名であるが、これに加えて地域の受講希望者を加えて30名あまりである。今日はインプラントについての講義、概論と設計原理という内容で、担当は華西口腔医院でインプラント科を担当する莫Mo安春先生である。インプラントの歴史から実際の臨床までを要領よくまとめていた。講義を中座して10時半、放射線科王虎先生を訪問、医歯薬出版の翻訳原稿について不明な点の確認と2症例の追加をお願いした。



ここに医歯薬出版の原稿の一部を転載する。「四川大学華西口腔医学院は中国西南部に位置し、1907年の建学、中国口腔医学発祥の地である。3回の名称変更を経ており、はじめは四川医学院口腔医学院、1985年華西医科大学口腔医学院、2000年四川大学華西口腔医学院となる。現在、正規登録されている職員は400人を超え、在学中の学部生、修士、博士及びポスドクは1,000人を超えている。附属病院である四川大学華西口腔医院には歯科治療台300台、病床数250床で口腔腫瘍、創傷、口唇口蓋裂及び顎矯正外科の4病棟がある。放射線科にはデンタルおよびパノラマ装置の他に、CBCT1台(モリタ3DAccuitomo170E)、16列の多列CT1台(Philips)がある。外来患者は、1日2,00-3,000人。患者は四川省を主とした西部地区及び中国各地から来ている。放射線科での検査件数は1日平均700件、このうちCBCT撮影は120件、スパイラルCTは平均5~10件である。CBCTではインプラント検査が多く、歯内歯周疾患、口唇口蓋裂、歯原性・非歯原性良性腫瘍、顎関節症、外傷(顎骨骨折、外傷歯及び歯槽骨骨折等)、埋伏歯・歯の発育障害等がある。(一部省略)」



学内を散歩。昼食はいつもの近くのレストランでおいしい食事。私の講義は 2 時から。 タイトルは昨年と同様、歯科医療における放射線:線量・人体影響・そして被曝低減」で ある。広島・長崎の被爆者、Stuart White たちの報告、最近の小児 CT による影響などの 疫学調査結果、低線量被ばくの人体影響についての曖昧さなどを説明した。そのうえで、 歯科の X 線検査で考慮すべき点を挙げて解説した。中国語への通訳は英語よりも日本語の 方がいいということで、これも昨年同様、講義は日本語で行った。通訳は華西口腔医学院 の学生で日本語を勉強中とのことであったが、彼女にとってなじみの薄い内容なので苦労 していた。私のスライドは基本的には英語で、その一部を日本語併記にしたものを準備し ていた。この講習会に参加する歯科医師は地方の 2 級病院に勤務する方たちで、その多く は英語を理解しないとのことであった。私が中国語で講演できるのなら英語のスライドの ままでもいいが、現状は中途半端である。次年度以降の対応として、講義の中身を情報伝 達的なものから思考中心的なものとし、双方向的講義に変更することで、文字や言語での 交流の負担を軽減するのがいいように感じた。今回も図や写真を中心とし、受講者に話し かけることで、講義は生きたものに変わっていった。講義後の充実感を久々に味わうこと ができた。特別講義ということでもあるので、資料を配布の上で、自由な対話ができるも のに全面的に変更していきたい。その方が通訳ははるかに楽だろう。なお、今回の通訳を した学生は今後、華西の交流校である大阪歯科大学を第一に考えて、留学予定という。

夕食は武侯祠 Wuhou に近い古いレストラン「欽善齋, Qin Shan Zhai Health Estates」、この地方の火鍋で、おいしかった。その後、夜店の立ちならぶ錦里 Jinli を散策した。







11月27日金曜日、10時から日中医学協会中長期研修の一つである看護の研修を視察した。華西医学院には四川省で看護における指導的な人材を育成する教育施設である四川大学華西護理学院があり、日本と同様、高校卒業後に入学する4年制の大学である。ここの院長は胡秀英さんで、千葉大で看護学の博士を取得した笹川留学生である。中長期研修では中国国内の6つの施設で、2名ずつ、計12名が笹川留学生だった指導者について臨床研修を6か月間行う。この病院には胡さんの指導の下、2名の看護師が特に老人看護について研修していた。両者ともに新疆ウイグル自治区、ウルムチの大学病院からの派遣とのことであった。なお、胡さんの話では市内には多数の看護師養成学校があり3年制とのことであったが、看護師業務では4年制卒業生との差別はないものの、教育指導者になるためには4年制大学の卒業が望ましいとのことであった。

いくつかのことが話題となった。「認定看護師」のこと、これは日本でも導入されているが、中国ではがん、糖尿病、老人病、精神病など、8種類の認定看護師がすでに進行している。胡さんは老人病の認定看護師であり、このような 3 級甲の大学病院でその教育が行われている。この病棟は2名1室で手厚い看護が行われているが、看護師の病棟での配置は、四川医学院の平均は8:1であること、ICU などの2:1から薄い病棟まで様々であるが、適切に運用されているとのことであった。







華西医学院 老人診療科にて

今日は午前中で仕事を終えたので、ランチをとりながら日中医学協会の留学生、中国内研修について考えることができた。事業には従来からの留学生事業と一昨年から始まった中国国内での研修事業、支部学術交流会、中長期研修の3つの事業がある。

留学生事業は今期(2014 年)から大幅に予算規模が縮小され、渡航費・滞在費はすべて派遣側 (病院や大学)の負担とし、協会から各施設に30万円の支援金を払うのみとなった。そのための、30名の定員に対して2014 年、2015 年では留学生数が一ケタ台となった。先日、私も試験官として関わった北京での選抜試験では30名以上の応募があり、28名が採用されたが、成績上位の10名は優秀で積極的であったが、それ以外は予算があるので採用したという状況であった。また希望者の多くは日本での診療参加を希望しているが、受け入れ病院に差はあるものの、見学程度にとどまる施設が多いようである。現場の多忙な医師たちにいずれは帰国する留学生たちを指導する意欲は薄いと考えるのはふつうだろう。多額の研修費をとって、これを現場の指導医にフィードバックすることが可能であればいいが、おそらくこれは難しいだろう。ということであれば、基礎研究者に限定するのはどうだろうか。今後は本事業を継続する価値があるのかどうか、充分、検討する必要がある。

中国国内での研修事業であるが、6つの研修があり、口腔はその一つである。講義に加えて実習を重視しており、参加者の評判はいいという。主として地方の病院の歯科医師たちであり、成都で研修する内容は彼らの日常の診療を大きく変えるだけのインパクトがあるそうだ。中国政府が重視しているのはこうした地域の医療施設のレベル向上である。医科では「総合診療」の研修もあるが、これも同様な意図で継続している。中国はすでに経済力は日本を凌ぐほどで、成都の街を歩いていると米国の豊かな街を連想させるほどである。しかし実は華西医学院のような大病院に行くと多数の患者が押し寄せて、医師は過重な労働を強いられているのがわかる。個人医院や地域病院はあるがそのレベルは低いと思いこみ、あらゆる人たちが信頼できる大病院に来るのである。これを改善したいと政府が考えるのは当然である。日中医学協会が引き続いて中国の医療に関わるのであれば、ここはその理念、活動綱領を再度、検証するべきである。協会独自な活動をするというよりも、中

国政府ないしその地方政府の決めた医療政策を、同学会を通じて支援する、そういうことであると思う。例えば、四川省の口腔衛生の実態、歯科医療政策を知らずして、こうした研修を継続することは随分とおかしなことだと思う。



華西医学院の診断放射線科には撮影した画像を患者自身がプリントできる装置がある。

3時、四川博物院を見学。1階の石柱はそこに施されたレリーフや彫刻はこれまでに見たことがないもので、その巧みさに驚かされる。その他、青銅器やポーセレンの類は他の中国の美術館と同様なものではあるが、多彩さと絵柄にはその都度、楽しまされる。

夕食は近くの春熙 Chunxi のショッピングモールの中のお店で軽く済ませた。





11月28日土曜日、8時半から笹川留学生の同窓会である「同学会」の成都支部学術交流会が開催される。私のここでの務めは日中医学協会としての挨拶をすることである。 挨拶は以下の通り、「皆様、お早うございます。私は日中医学協会では日中笹川医学協力プロジェクトに関わっている岡野ともします。本日は、同学会成都支部の学術交流会に参加し、皆さんにお会いでできて、誠に光栄です。この会は会員の皆様同士の交流の場、そして皆様の最近の研究成果の発表の場として7つの都市で開催されています。「日中笹川医学奨学金制度」で学んだ方々が、世代、専門領域を超えてこのような形で集うことは非常に素晴らしいことだと思います。奨学金制度は1986年に始まり、来年が30周年となります。この交流会を通じて、同学会が更に発展していくためのネットワーク強化の場となること を期待しています。本日はこのように多くの方々にお集まりいただき、ありがとうございました。」ということ。講演会は華西医学院の近くの天使賓館にて9時から開催された。講演は4つあり、itraconazaleという抗真菌薬が小児のhemangiomaに有効という話(冉Ran 玉平先生・4期・華西医院皮膚科)、中医の薬物の毒性と副作用の話(李廷謙先生・1期・華西医院中西医結合)、緩和医療の話(ding 群芳先生・25 期・華西医院老年科)、看護師としてMayo Clinic にて経験したこと(胡 hu 秀英先生・18 期・華西護理学院)、であった。いずれも多くの質疑があり、学術交流会の名称にふさわしいものであった。成都の同門会の幹事役ともいうべき人は劉先生・8 期・協和医学院輸血所であり、またこの地域の出世頭は8期の魏于全先生で、彼は四川大学の副学長であり、また日本の学士院にあたる中国科学院の院士でもある。彼のお嬢さんは来年から東大の分子細胞生物学の豊島近教授の下に留学するが、先月の笹川留学生の選考試験で最優秀の成績で採用された。









午後3時、寛窄巷子(Kuanzhai Alleys)、昔からの街並みを利用して、現代風の店舗やレストランにするいうのがあるか、ここもその一つである。土曜の午後ということもあって若い人たちで賑わっていた。成都はチベットや西域にも近いことから、その影響を受けた土産や食事もあることが上海や北京と違う所である。



今日の夕食は魏于全先生のご招待で、錦江飯店の18階レストランで食事となった。中 国料理であったが非常にうまいものであった。



11月29日日曜日、帰国である。8時にチェックアウト。成都10:55-13:40北京 CA4115 出発は時間通りで遅延なし。混雑はなく3席を独占。

北京 15:45-20:00 羽田 NH962 これも予定通り。